



文化部コーナー

第13回 六甲おろしの風に乗って 旗振山(その2)

布引支部 神木 哲男

鉄拐山は、旗振山の東北、須磨区と垂水区の境にあり、標高は234、236、237メートルと地図や本によって多少の差があります。鉢伏山、旗振山からつづく須磨連峰の一峰です。山地一帯はかつて御料地(皇室の所有地)でしたが、昭和天皇のご成婚記念事業として、払い下げを受け、昭和3(1928)年、山岳公園として完成、のちの須磨浦公園の基盤となりました。

近世には、山頂に明石藩の狼煙台(藁などを焚いてのろしを上げるための台)が設置され、藩主の交代毎に夜間にのろしを上げて領土の確認をしたことが知られています。

山の名の「鉄拐」(「拐」の字には、杖=拐という意味と、「かどわかす・引っかけ」という意味



があります)は、ここでは鉄の杖を意味しますが、その由来には、昔、この山裾に住んで鉄で出来たツエ(拐)を持ってこの山に登り沢山の薪を作って背負って降りてくる力の強い木こりを人々は鉄拐と呼び、彼の登る山を鉄拐山と呼ぶようになったとか、猟師がこの山で鹿やイノシシを捕るために「鉄のカセ」を仕掛けたことからとか、諸説ありますが、正確なことはわかりません。

平安時代末期、元暦元(1184)年には、鉄拐山の南斜面の浸食谷の一つ、「一ノ谷」が戦場となり、義経がひそかに70余騎で山を越え、「鹿も四足、馬も四足、鹿も越え行くこの坂路、馬も越せない道理はないと、大将義経真っ先に」(文部省唱歌)と歌われているように、この谷を駆け下り(「逆落し」)、麓に陣を布いていた平家の軍勢を背後から奇襲したことは、「平家物語」などの軍記物でよく知られています(一の谷から東方の「鶴越坂落とし説」もあります)。

鉄拐山の北東には旧縦走路として孤高の登山家・加藤文太郎が通った「文太郎道」があります。加藤文太郎は、明治38(1905)年、

兵庫県浜坂町(現新温泉町)で生まれ、今年が生誕115年に当たります。神戸の三菱内燃機製作所



(現三菱重工株式会社)に入社し、技師として働くかたわら登山を始め、兵庫県内の国道・県道を踏破し、神戸から故郷浜坂まで徒歩で往復、またヒヨコ登山会の先輩格にあたる「神戸徒歩会」(明治43年、塚本永堯らによって創立)の例会登山に参加、六甲山の縦走をはじめたことでも知られています。誰が建てたのかわかりませんが、「文太郎道」の表示板には、「元六甲縦走路(文太郎道) この道には昔の六甲縦走路がそのまま残っています。大切に残したい道です。」と書かれています。

梶尾山には400段近い階段があり、六甲全山縦走路の中で最初のきびしい場所としていられていますが、次の横尾山は標高312.2メートル、高倉山ともに神戸市のポートアイランド埋立て用土砂が採取された場所で、「山、海へ行く」と言われた山です。



横尾山を越えると、風化した花崗岩が多い岩稜地帯になり、いよいよ須磨アルプスと呼ばれる岩場の急峻な場所が現れます。いつ頃から須磨アルプスと呼ばれるようになったのか明らかではありませんが、「馬の背」と呼ばれるところは、ひとり人がやっと通れるくらいの細い、その名の通り「馬の背」のような場所です。

背山とよばれ、大都会のすぐ後であって、市民に親しまれ、毎日登山の山でもある六甲連山のなかで須磨アルプスは、芦屋のロックガーデンとともに、ちょっと特異な場所と言えるでしょう。